



20260125 猪高の森自然観察会 2026年1月報告書

猪高の森自然観察だより 2026・1月号

開催日時：2026年1月25日（日）

テーマ：生きものたちの冬ごもりと春待ちの姿

天候：曇りのち晴れ

気温：最低-0.1°C、最高6.5°C

（名古屋に於いて）

参加者：14名（内NACS-J会員4名）

コース予定：森の集会所 → 井堀下池 → 井堀の棚田 → 復路 → 森の集会所

（左上の画像はシダレザクラの里の陽だまりに咲くニホンズイセン）

時折、厳しい寒波が来るものの、この地域ではしっかりした雨がずっと降っていません。ニュースでも各地で山火事が発生し、鎮火が進まず、乾燥しているのはここだけではないようです。周囲からの水の補給が頼りの塚ノ杣池も、ずっと水位が下がったままです。

11月から1月27日までの降水量は平年の53%の95.0mmとのことで、今後もしっかりした降雨の予想はないとの事です。

○冬にしか見ることの出来ないものは…。（このコーナーは猪高緑地以外で撮られた画像も多く含みます）



雪の降った1月12日の猪高緑地
モノクロの映像のようです。



咲き始めた紅梅にも雪が…。
(1/12 猪高緑地)



雪を被ったタチカンツバキ、赤と
白のコントラストが美しい。
(1/12 猪高緑地)



霜のついたウメモドキの実
(1/15 八竜緑地 朝8:30
30分後に消える)



霜のついた擬木
(1/15 朝 八竜緑地)



左の拡大図 霜が針山のよ
う



霜の付いたイヌツゲの葉
(1/15 朝 八竜緑地)



シモバシラの霜柱 (※)
根元に噴き出るように発生
(1/9 森林公園)

霜(しも)は、冬や早春の晴れた日の朝、放射冷却によって冷やされた地表の物体(草、木、屋根、車など)に、空気中の水蒸気が凝華した姿として付着する現象
(AIによる説明)

氷点下になった朝、早めに馴染みの緑地に出かけてみてください。きっと、今までとは違った情景に出会えます。そして、それはたぶん美しいと感じられる事と思います。

(※ シモバシラ:シソ科の多年草。茎は秋に枯れるが、根は活動を続けるため氷点下の朝に道管内の水分が凍り、霜柱となって、茎から生える。地中の根が凍るまでこの現象は続く。

参考:ウィキペディア)

○縁起の良い木を探してみよう！



センリョウ (千両)



マンリョウ (万両)



ミヤマシキミ (億両)



カラタチバナ (百両)



ヤブコウジ (十両)



アリドオシ (壱両)

縁起の良い木を調べるとどうも「語呂合わせ」で決められているようです。まず、「両」の付く植物から…。

ご存知の通り「両」はお金の単位で、それも、大金です。「壱両」からあります。

一番名の通っている「センリョウ」「マンリョウ」は植物名そのものが「正式和名」になっていますが、その他は「あだ名」ですね。

どれも赤い実をつけ、寂しい冬の庭を飾り、同時に「富と繁栄、財産」をもたらす希望と期待を込めたものなのでしょう。

どの種類も鉢植えでも育てられますので、揃えてみるのもよいでしょう。山や森から採らずに園芸店でお求めください。



ナンテン(難転?)



クロガネモチ(黒金餅)



キミノセンリョウ(黄実千両)
「金運上昇」の象徴とか。。。



シロミ(ノ)マンリョウ(白実万両)

ナンテン(南天)は、「難を転じて福となす」の語呂合わせで“魔除け、厄除け”に古くから利用されています。

クロガネモチは名前の響きが「苦勞がなく金持ち」の語呂合わせから“金運上昇、出世”などを願う縁起の良い木とされています。

こんなにも語呂合わせが由来とは思っていませんでした。

名前や縁起の由来については、他説もあります。

調べてみると楽しいかも知れません。

○チョウセンカマキリの卵鞘(らんしょう)見たことありますか?



チョウセンカマキリの卵鞘

左は、棚田エリアで見つかったチョウセンカマキリの卵鞘です。個人的には初めて見ました。

成体はオオカマキリとよく似ているため、捕まえて胸元や翅を広げて観てみないと同定が出来ませんが、卵のかたまりははつきりと違います。滅多にお目にかかりません。



オオカマキリ
の卵鞘

右下の画像はオオカマ

キリの卵鞘です。参考までにどうぞ。

成虫の区別点は、前足の根元の色がオオカマキリは黄色、チョウセンカマキリはオレンジ色で後翅の色がオオカマキリは黒っぽく、チョウセンカマキリは半透明です。

よく見られる場所にも若干違いがあり、オオカマキリは少し高さのある茂みを好み、チョウセンカマキリはより開けた明るい平地を好むとされています。

○塚ノ杣池でカワウ（川鵜、河鵜）が羽を広げています。一体何をしているのでしょうか。



カモの仲間は尾羽の付け根の近くに「尾脂腺（びせん）」と呼ばれる脂を出す器官があり、その脂をくちばしを使って羽毛に塗り、撥水性を保つことによって、体が濡れるのを防いでいます。

しかしながらカワウは、より潜水して獲物の魚を取りやすいように進化発達したようで、撥水性が弱く羽が濡れてしまうので、飛ぶためには羽を広げて乾かすことが必要となってきます。

そんな訳でカワウたちは、ひとしきり食事が済むと羽を広げて日向ぼっこならぬ「羽干し」を行っています。

○緑地で観られるいろいろなもの(画像は猪高緑地以外で撮ったものを含みます)

冬の観察会で見逃してはならない事物と言えば、やはり葉痕と冬芽でしょう。

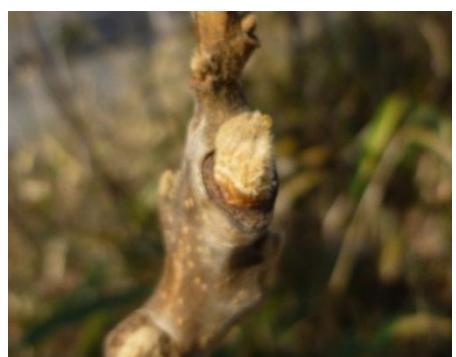
葉痕とは葉の付いていた跡のことで、葉が付いていた時に水や養分が通っていた管の跡が木の種類によって特徴のある様々な形に見えます。あなたは何に見えるでしょうか？



クサギの葉痕



トチノキの冬芽はベタベタしています。何のため？



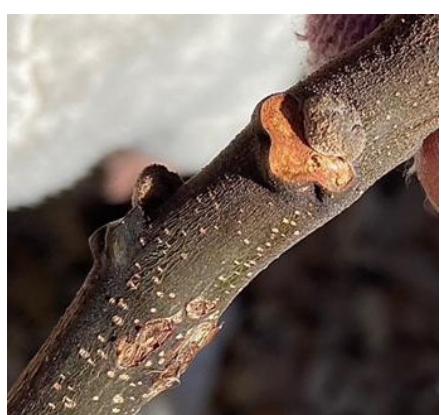
ヌルデの冬芽は隠れています。



カラスザンショウの葉痕と冬芽



ユズリハの葉痕と冬芽



センダンの葉痕と冬芽



ハリエンジュの冬芽は隠れています。



羊の顔ではありません。
オニグルミの葉痕です。



クズの葉痕

この他にも、いろいろな木の葉痕と冬芽を観ることができます。台詞を言いたそうな葉痕には是非しゃべらせてあげてください。楽しい葉痕アルバムがきっとできるでしょう

(注:葉痕を調べていく途中で、既知の葉痕を AI を使って調べたところ、とんでもない在り得ない木の名前を出してきたこと多々ありました。不明の種類は春まで待って、葉っぱが出、花が咲いてきて時に改めてお調べください。AI は要注意です。)

冬は決して寂しい季節ではなく、春の訪れを待つ多くの生き物の季節です。観察会当日は寒い日でしたが、暖かく穏やかな冬日和などには、成虫越冬しているチョウの仲間が顔を出し、大きな葉の裏では小さな虫たちの姿も見つけることができるでしょう。

南側の暖かな斜面では、一足早い春が顔を覗かせているかもしれません。

1 頁目で紹介した冬しか見られない現象もありますし、フユシャクやロウバイの花、冬の渡り鳥など家に閉じこもっている理由はありません。防寒をしっかりとし、出かけましょう。



ウスタビガの繭(まゆ): 独特の形で「山かます」と呼ばれています。

次回観察会は 2 月 22 日 (日) 森の集会所集合 9:30~です。

(雷ナウキャストにて雷発生の危険のある場合は中止)

名東自然倶楽部の HP では毎月の猪高の森の自然観察会の紹介をしています。

<https://sizen.ciao.jp/index.html> から

ご覧になってください。

(右上の自然観察グループをクリックしてください)